焼け野原

白谷瑞希

目次

はじめに 1
ガガーリンが見た地球 2
いつか見た風景 3
夏休み 5

はじめに

本書を執筆するに当たり、辛いときもめげそうなときも、温かく応援してくださった皆さまに心から感謝を捧げます。

ガガーリンが見た地球

　かのガガーリンは言った。「地球は青かった」と。人類初めての宇宙旅行。そこから見たこの惑星は美しかったと。本当かい？ この地球は焼け爛れてなかったかい？ 何度も原爆実験を行なったこの惑星の人間は、罪の意識を持っているかい？ だって、この国を焼いたのはこの惑星の人間なのだから。

いつか見た風景

　誰かの記憶だろうか。まさか。そんな事がある筈がない。でも目の前に広がる焼け野原の記憶は、確かにヒロシマの原爆直後のものー。

その焼け野原を夢で見るようになったのは、教科書でヒロシマ、ナガサキの写真を見てからだった。響子がその写真を見たのは十五の夏。蝉が五月蝿い汗ばむ季節に脳裏に焼き付いた写真だった。それから毎晩のように、焼け野原の夢を見る。黒い雨が降る。見たこともないのに。焼け焦げて荒れ果てた街。横たわる沢山の死体。川を流れていく死体の腹が、ガスで爆発しては次々と流れていく。

「お母ちゃーん」

黒い爛れた肌で幼子が母を呼ぶ。目には涙が溢れる。

「ヒロシー！」

べっとりと糊のように剥がれ落ちかけた肌を引き摺り乍ら、母親が所在の知れない息子を呼ぶ。

響子は立ち尽くしている。ひたすら、黒い雨に打たれ涙を流し乍ら。これが夢だと頭の何処かで知りながら。

なぜ、こんな夢を見るようになったのだろう。夜中に息切れをしながら飛び起きて、響子は記憶を反芻した。そうだ、写真。ヒロシマとナガサキの写真。リトルボーイとファットマンという名の怪物が落とされた地獄。授業で散々たる悲劇を聞いた。それがまさか、この日本で起きたなんてー。

アウシュヴィッツのことも授業で習った。なんたる許されざる所業。同じ人間がしでかしたことなのか？ 響子の胸は張り裂けんばかりだった。

第二次世界大戦を勉強する度に、人間とは何かを考える。人間とは一体どんな存在だろう。そして、それを知りたい私の心とは一体なんだろうー。

なんだか、とても大事なことのように思えた。その感覚が。だから、響子は自分でも図書室で戦争について、調べ始めた。その感覚が何かを呼んでいる。人間として大切な何かを。

夏休み

　夏休みの自由作文のテーマは戦争に決めた。もう中学二年。早いということは、きっと無いのだろう。時々思うことがある。大人は私たちを甘く見ている。舐めている。私たちはそんなに馬鹿じゃない。

図書館通いが始まった。同じ敷地内に隣接するプールで友達の真美や千鶴と遊ぶ。
「ぷはーっ」
水面から顔を出した瞬間、私は魚へと変貌する。太古の世界にいたね。同じくこうして水面下で泳ぎ、酸素を求めたね。懐かしい感覚に襲われる。

「響子って本当に泳ぐの好きだよねー」「深海魚みたい」

ケラケラ笑う友達二人を尻目に、もうひと潜りを続ける。泳ぐことは何より好きだが、もう生活の一部になっている。努力とか日課じゃなく、自然と水に戯れることが日常。

子どもの頃、泳ぎをすぐに覚えた。今も子どもだが、胸は去年より少し膨らみウエストは引き締まり、お尻も丸くなってきていた。第二次成長期。体の変化と共に心もぐっと育つ時期だと、学校で習った。時々、体と心の変化についていけない子がいるーしかし、響子は若干の戸惑いはあるものの、心で体の変化を受け入れられる子だった。
泳ぐことは、子どもの頃の私にとっても、受け入れやすいスポーツだったのだろう。無論、スポーツという認識も自覚もないが。

　随分と水との交流を深めた後に、図書館で真美と千鶴と勉強をする。作文の参考図書を探しながら、夏休みの宿題をするのだ。

蝉が五月蝿いー夢と同じに。

東京近郊から少し離れた片田舎だが、こうした環境は少なくなっているとニュースか何

かで読んだ記憶がある。原爆が落とされた朝も、こうしてけたたましく蝉は鳴いていたのだろう。その日にあんな惨状に街がなるとは思いもせず、ただひたすら命の限り、生きる喜びを鳴いて訴えていたのだろう。きっと。

戦争というテーマは重かった。なんの本を選べばよいか、分からず図書館司書の人に相談したら、壷井栄の『二十四の瞳』を勧められた。そういえば、教科書にも随分と前に切り抜きが載っていたなぁと、思い出す。切り抜きは読んだが、この本自体は読むのを忘れていた。今迄、縁が無かったのだと思う。

『二十四の瞳』を借りて、３人のテーブルに戻る。なんだか騒しい気がしていたが、はしゃぎ過ぎて真美と千鶴は司書の人に怒られていた。
全く馬鹿なんだから。舌の中で呟いた後に予定していた勉強を始める。響子が真面目に机に向かうと、二人は目を丸くしながら、同じく大人しく机に向かい始めた。

来年は受験になる。赤門を目指す訳じゃないが、最低でも社会人として食いっぱぐれのないように、いい高校や大学に入っておきたい。『さとり世代』と言われる彼女の世代は皆そう思っている筈だが。どうやら真美と千鶴は世代を間違えて生まれてきたらしいな。

必死にカリカリと鉛筆の音を響かせながら、勉学に励んだのち、私たちはバイバイをした。手には戦争という重い荷物を持ち乍ら。

焼け野原

著　　白谷瑞希

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社